

## V Marie-Victoire Nantet助教授（ランス大学、フランス）の短期招請について

文学部教授 高 田 勇

1994年度国際交流基金事業による外国人研究者として、マリ＝ヴィクトワール・ナンテ（Marie-Victoire NANTET）先生 を迎え、実り豊かな文化活動をしていただいた。

ヨーロッパにおける本学最初の協定校となったフランスのランス大学人文学部助教授、新進気鋭の比較文学者として活躍中のナンテ先生は、本学では次の三つの講演においてその成果を十分に発揮された。これらのテーマはまさに先生が鋭意取り組んでおられた永遠の文学的テーマである。

まず「メタモルフォーズ」を扱う《ペトラルカの『カンツォニエーレ』とロンサールの『恋愛詩集』第一の書における愛の情念とメタモルフォーズ》（*Passion amoureuse et Métamorphose dans le Canzoniere de Pétrarque et le Premier Livre des Amours de Ronsard*）、続いて、「文学作品と場所との関係」をクロードルと日本を例にとって綿密に考案した、《場所との関連から見たポール・クロードルの作品：日本の例》（*L'oeuvre de Paul Claudel dans son rapport avec les lieux, à l'exemple du Japon*）、最後に、ホメーロス、ラブレール以来、文学作品に現われる「探究」の物語の主題から追究した《探究の物語の伝統におけるジェラルド・ネルヴァルの『シルヴィー』と『オーレリア』》（*Sylvie et Aurélia dans la tradition du récit de quête*）である。

この三講演の聴講者は、本学の大学院生と教員が中心であったが、各テーマを研究する多くの専門家も出席して、活潑な質疑応答が繰り返されるとともに、各分野の研究現状の詳細な報告が行われ、きわめて有意義であった。

また、講演の他にも、院生、教員たちと時間の許す限り交流に努められた先生は、日仏文化交流を身をもって示された。岡野学長を表敬訪問された際の本学の国際交

流への意欲、図書館の特に文学面での充実ぶりをつぶさに感じとられた先生は、ランス大学にあますことなくこれを報告されている。これはなおいっそう豊かな両大学間の交流に貢献することと信じて疑わない。

さて、ナンテ先生は、フランスの20世紀を代表する劇詩人ポール・クロードル（Paul Claudel）（1868－1955）の孫娘にあたり、この偉大なる祖父と十数年にわたり親しく交った経験を持つ。因みに先生の近著『王の陰』（L'Ombre du Roi）Stock, 1994はその体験を語る好著である。

このような事情もあって、先生の訪日は本学の教授たちはもとより、クロードル研究者、フランス演劇研究者からも、大きな期待をこめて待たれていた。

ナンテ先生自身にとっても祖父が愛した国を知ることに大きな意義があった。偉大な劇詩人クロードルは、周知のとおり、外交官としても大いに活躍した。1921年から1927年にかけて、彼は駐日フランス大使として、東京を中心に日本をくまなく巡った文化人外交官としてあまりにも有名であった。関東大震災を身をもって体験したし、彼の作品には日本文化の影響が顕著である。

したがって、先生にとっては祖父が永年滞在し、作品にも描いた日本の文化にふれることが積年の夢であった。このため、フランス大使館を訪れ、駐日フランス大使ウーヴリュエ氏と歓談したり、クロードルが大使時代に夏休みを過ごした日光中禅寺湖畔のフランス大使館別荘をも訪れて、祖父の足跡を偲ばれた。

以上のような関係もあり、さらに先生自身も熱心なクロードル研究者として研究活動を続けておられるため、本学以外にも、東京日仏会館と、関西アリアンス・フランセーズ（日本フランス語・フランス文学会関西支部と共催）でも、『ポール・クロードルの日記の特質：1921～27年の日本滞在メモを手掛かりに』（Caractéristiques du Journal de Paul Claudel à travers ses notes concernées au Japon entre 1921 et 1927）と題する興味深い講演をされた。両講演後のパーティには数多の在日フランス人を含む、クロードル研究者が参加され、将来の研究の展望を含めて、先生と歓談され、クロードルを偲ぶとともに、明治大学の充実した国

際交流事業への讃辞が寄せられた。

さらに、「日本ロンサール学会」においても、ペトラルカとロンサールとのさまざまな関係をさらに深く追究する講演を行われ、諸研究者と熱心な意見の交換をされた。この講演は「ロンサール研究」(Revue des Amis de Ronsard du Japon) 第9号(1996年5月刊行予定)に全文が掲載されることになっている。

短い滞在期間であったが、美しい紅葉の季節に、日光、伊勢、京都、奈良、広島、宮島等々を訪れ、先生は日本の自然と文化にふれるとともに、クローデルの足跡をなつかしく偲ばれた。

またクローデルが大いに感動し、その作品にも発表している、能と歌舞伎も見学され、同じような感動をされたこともつけ加えておきたい。

最後になったが、ヨーロッパ初の協定校からのナンテ助教授の来訪とあって、池内正直所長をはじめ、国際交流センターの皆様には格段の御配慮をいただいたことを、ここに熱く御礼を申しあげる。